



夢想兵衛胡蝶物語後編

参

~ 13  
3096  
7



門へ13  
3096  
巻 7

夢想兵衛胡蝶物語後編卷之三

東都

曲亭馬琴戲編

哀傷郷

哀傷の徳の害あり。そ我りて。関雎の哀を傷らば。人の人々既も情  
の人の情あり。又哀傷あり。とて。むじ。杞梁が妻が哭く。  
郷崩と城陥り。處女が哭声。天に通じて。雷電下り。怒り。といふ。なると  
至誠の抵と。ところ。申包胥の七日哭。秦王終つ。楚を救ひ。烏賊津使主  
由七日哭。衣通姫を誘ひ。ぬ現や。り哭り。の。時不當。て。雲の中。のれ  
バ。丁を。切。も。あ。ま。の。雍門子が哭上手。又楠公の珣哭夫。今に至。て。稱。せ。る。  
さ。且。が。嗚。子。と。持。統。天。皇。勝。と。ぬ。り。の。と。と。歌。骨。牌。の。負。獲。よ。う。と。も。笑。ふ。  
べ。く。と。び。哭。て。娛。り。た。夜。も。あ。ま。の。笑。ふ。と。強。顔。と。高。尾。が。い。ん。う。と。下。

昭和九年  
七月二十四日  
辨末

涙はそと笑ひぢく油酌のろろぬが浮世樂を盡く哀を來り哀去て  
 飲び來る飲ぶのを飲べば哀地とてふやせがほし只飲むと哀を静  
 天理よまてふりの神仙とも老佛とも馬鹿とも利根ともいつるらん  
 てもく哀傷といふ國へ人ともあつらひとて哀むれりて生年  
 とよまて五月雨の簷下。痲病患の樋口。とらうくと洞落して暮らぬ  
 日もあつたれば泣息るを義人と稱し愁眉を上品と定め病狀を愛に  
 ぐり。壓口かくと娼へがるゆゑ赤子の啼声をきく命の長い短いとあひり  
 幼少より子どもらよ替古ごとく哭ととの習はるから衣類も膝より  
 袖が雨に絞るもあぬ血涙は手掛とせし入る。入るうしうのそがじこ  
 朝の板敷炎天小額の汗を拭ふ如く。些立あつて女中あんと杖原上田の鼻紙  
 も拭ふ涙で毎日く。十帖あつる費とあり隣の女兒が哭替古まで。

あの子の声はよくとて惜のよあつたところかかひるのとて評ととる。寒三十日の  
 哭復ひ十九土用の砂糖湯も皆よく哭声立てふが為かじと煙もある  
 りの飲とこまを怪むりのほるけと。羨む兵衛の紙老鳩の飛ぶは  
 まじくやれども亦この國へ菓とらえつ。えんまつけ。直と果  
 りのたより。向ふも誇ふも人さへ見え目水とらた。おひうれば忽地は  
 ころと哭やして止所をまらぬ一言まの問答もあるべ。さ何ゆゑ  
 かのぞ。年中哭て暮らるとあふ凡との國俗の性どく事は觸  
 ころよつて物なをひるさてもあつらう。やうら春の門松と冥土の菘の  
 一里塚とえと哀いから。四方山よら八重霞の定めたる秋の雲と來り  
 易さと思ひや。嘆の採らぬ毎樹の花も。ち散らたのまをを視。夏乃  
 ゆへへの蚊遣火の茶毘の煙と世を果敢も山の狭み。秋の月終の友と





高木村去儀行新編巻三

日

三

人の奴婢するんども。見糸の目くら出らりの涙雨を先へ海し。持女夜  
護の初対面ら。後朝の涙を涙ぞ人なる三度の膳よむくハ噎て頓  
死のまやせまの飲食傷の志やせまの飲と着を取らり胸あがり此  
小の筒ありのの春潮て夏植つけ。秋くら冬之收る采の一粒ありとも  
化るんや農夫の身の膏で肥し他大菩薩今むごとと日か咽入ると  
之ハ物体るも。哀しうござると哽らり。食とらころころの泣せと。彩宅ひら  
そ被衣をためあろ客中亭上も眉うち影昇ゆこの年未らろがけてや  
や普請の成就たれど修造やとてあそあるん祝融舞馬の難  
あふ。忽地鳥有とるりぬべ。すうろくとも百年と盡たがる家々のあ  
び。死て衣敷の思ふ交よ。汗且め申え御息由とる。非如家や住荒さば  
衣敷雜具の持あるごとと聖も志且ぬハ命の家庫が先へ減る飲亭主

の命が先へ竭る飲とてゆりてゆら世の假宅造化の借屋今さららよ。  
久むその目とぢひ女とべ奈何哀うあるまらう。ある程是の道程至極く  
結構るる家造りも。不如意なる且バ他人の有又その人由一生涯便む  
正や。何ぬ正や。阿房の餘煙由只三月崗岳潮とく田園とるる果ハ  
浅茅が草芥と虫の青むらや残るらん虫の青むらや残るらんと鼻  
あつすり小強を殺よ。おのく愁ひ声馳走の酒由咽喉へ入る。あつすりよ  
常と親とるも。一宿の起り由。水盃で遺言し。ぬる日やでいぬ  
ぬりのと。ひ定めて妻由子も。影膳居む泣く。年弱とらの色情由。  
ゆふをさらのためと哀も。子ども開諍も生れたをぢひかゆ多親くら  
哭也。又富りの富まふ子孫相統の後も。財の竭るん正と哀も。  
負死のの負し。死すよ。ぢぬ不義理の生れぬ先よ。ぢ死すよとく







かまへは又何ぞのりん。まづはあまごと。屍風ハ敗るといふ也。骨を存  
 かに骨今うの海靈あり。口説とて、さし凡の國俗の性にて。哀  
 傷をりて生卒とよむから。悲歎裏に逼りて大折するのたうと。これ  
 返りの知れず。既し利害を鏡喻とて。悲ひと醒とせよ。天乃  
 の声。巷小満て。口言と聽りのほ。こまぶとて。ひいよと。いれし。腹  
 のあくる。亦約る。こま。今こま。海は死し。と示さん。よく説とて。聴聞せよ。  
 夫喜怒哀懼愛惡欲の七情ハ人の世の常あり。生とて。静あるハ天乃  
 性感はて。動ハ性の慾態ある也。七情廢る。いま。怒。恨。貪。喜。哀  
 樂。まて。ひとり。哀む。いのち。あま。い。人の人。いとる。とあり。哀。死。別  
 生別。ま。ま。ま。の。ほ。物。哀。れ。も。又。怒。る。か。る。も。ま。ま。い。う。悲。め。か。  
 陰と破る。あ。く。飲。べ。陽と破る。よ。う。て。死。と。喪。の。の。悼。め。も。生。と。滅。

せと。喪。は。病。ある。と。死。ハ。肉。と。辞。せ。び。と。い。ふ。と。あり。喪。と。忌。服。肉。を。腥  
 こま。その。生。と。保。ん。為。ら。る。世。俗。ま。く。死。の。死。生。の。生。と。す。所以。と。説。  
 也。婦。人。の。仁。と。仁。と。結。と。君。子。の。仁。と。あ。ま。い。是。を。悲。歎。裏。に。迫  
 ま。ま。も。こ。ま。と。洩。さ。す。ま。ま。と。紋。経。く。その。死。と。求。め。の。あ。つ。いと。痛。く。  
 迷。ひ。の。あ。ま。い。生。死。ハ。昼。夜。は。異。る。び。生。ん。と。ま。ま。と。ま。その。う。ひ。う。  
 死。と。憎。め。も。その。う。ひ。生。る。日。ハ。生。と。死。と。死。る。日。ハ。死。と。あ。ま。  
 べ。吾。生。ま。て。五。尺。の。形。あり。口。死。と。一。指。の。土。と。ある。これ。生。ま。と。い。  
 と。いと。物。の。あ。ま。い。死。と。い。ふ。と。い。ふ。土。の。厚。み。あ。ま。い。ま。  
 生。と。土。と。ある。亦。何。ぞ。哀。む。孝。子。の。親。を。喪。ふ。と。死。哭。泣。と。声。を。惜。ま。  
 る。も。既。よ。の。喪。除。と。死。ハ。慈。眉。披。く。勢。著。く。ま。と。名。つけ。て。礼。節。と。  
 い。ひ。子。夏。が。除。喪。の。見。業。ふ。こ。ま。と。琴。を。予。へ。と。持。搦。て。こ。ま。と。

長きつまずき志まざればも先王礼と製一のり。され敢て正さばと  
 子張少除喪の見余ふ。是は正と奉を予へ持標し。是は歌ひ先王  
 礼を制し。敢至るべのめと。子夏由子張由孔子の弟子。其  
 つと有が。賢人の是とも。長きをりて礼を正さば。夫哭はの哀も。齊  
 斬の情。饘粥の食。孝礼。これ長き又礼は長きを思ひ捨る。物毎は涙のろ  
 く。長き。うら傷る。情。あや。思癡。彼狂人が物。對し。く。  
 終日哭と異なる。汝。汝。汝。聖人の時。因。位を安。世。當つ。く  
 その業。と。樂。む。哀。傷。は。形。の。主。神。の。室。る。り。形。を  
 勞。て。己。ざ。れば。ま。つ。ら。礪。を。精。を。用。ひ。て。己。ざ。れば。場。の。も。速。る。り。只  
 哀。れ。を。悲。む。く。その情。よ。ま。な。ば。悼。て。命。を。隕。ま。す。眼。を。病。り。の。ち  
 空。は。華。を。見。天。を。憂。る。の。の。墮。ん。と。懼。る。と。呼。論。は。ひ。と。く。お。ま。れ。い

ても。の。の。驚。死。哀。ま。で。り。の。の。死。悼。へ。も。先。愚。病。の。所。為。と。お。り。ひ  
 是。は。し。ら。が。形。始。より。雨。り。の。不。あ。は。又。始。より。あ。あ。あ。有。あ。も  
 あ。は。は。あ。あ。あ。ぬ。こ。ま。を。名。け。く。人。間。の。り。陽。子。を。長。壽。と。彭。祖。を  
 夭。折。と。と。も。人。の。壽。命。の。限。り。あ。つ。て。天。地。の。限。り。あ。ら。ぬ。限。り  
 ある。命。を。の。限。り。あ。ら。ぬ。一。年。三。百。六。十。日。眉。ら。ち。頰。め。せ。ら。ち。歎。き  
 こ。ま。ら。命。を。縮。へ。の。思。心。と。い。ふ。あ。あ。の。の。病。へ。ら。の。の。と。と。小。人。利  
 と。失。へ。ば。こ。ま。を。哀。と。士。人。の。名。の。為。小。こ。ま。を。哀。と。有。司。の。爵。禄。の。為。小  
 哀。む。の。歎。き。深。く。その。長。を。究。る。と。死。へ。身。を。り。て。こ。ま。は。殉。じ。る。不  
 至。れ。り。こ。ま。を。哀。傷。の。妻。の。悲。し。う。生。ぶ。と。ま。且。寡。婦。の。愛  
 惜。う。と。愚。癡。の。哀。傷。る。ら。ん。は。世。俗。の。宝。と。と。只。彼。雀。の  
 子。や。と。が。ひ。龍。の。腮。の。珠。と。と。は。が。た。貨。を。貴。び。て。乞。の。宝。を。失。ふ。の。憂。



野の 高き 骨を みの なる

あやむら 哀傷郷の なる野の



あやむら

列子天  
瑞篇曰  
易變而  
為一  
變而為  
七七變  
而為九  
九究也  
乃復變  
而為一  
云云

又憐へらさるるべや。人おのく穉さと死のいまも壯のとき死さるべや。壯  
年よるるべとどものいまも老後のいまも死ありんば。さぬなよ世ゆさる。賢  
も五十年。不肖あるも五十年。一生涯をさすもあつを。あつるもその子の生る  
をさす。と中その死ん時を哀も。春の木抄の花をさす。ちりるん後をさひかり。  
東山より生る月と。や西へ入る。終の友に祝へば。を祝ふべと喜ぶべとを喜ぶべと  
惜まる小似る迷ひる。慾多けしと平等用あふ。されど一と生じ。二の三  
を生じ。三より万物をさす。天地と父母と。それと一なり。萬物それと見え  
る。一が身は天地と共。生じて。只その一。小ぢまは。とど。その一。をさす。死  
ハ。一と言と。二とある。又その言と。いふと。死ハ。三とある。ばと。いふと。死ハ。か。且。バ  
一と。一が。一。生じて。兄弟あり。妻子あり。子孫あり。親族あり。主君あり。  
朋友あり。喜怒哀の。哀樂ある。死ハ。一。生じて。二三萬物を生じ。と。さる。べ。と。

のこられ。一。小ぢまは。一。生じて。一。小。終る。天理あり。豈凡夫私の胸算用り。一  
一生の動定を合。一。生る。骨の如し。人の死。さる。夜の如し。夜にして  
睡ぬ人あり。熟く睡。且。我と。さ。死。後。物あり。天の一元。一  
故。も。さ。死。人。不。異。る。と。ね。と。精神。い。滅。せ。ぬ。死。の。陽。向。時  
必。受。て。と。下。め。て。身。の。死。る。と。死。る。を。喜。怒。哀。樂。を。脱  
せ。ど。夜。死。て。昏。生。る。人。の。生。死。の。昏。復。小。の。覺。つ。と。死。由。睡。る。と。我。を  
忘。る。と。怒。る。と。天。地。と。壽。命。を。齊。一。せん。小。情。慾。の。争。か。さ。る。と。神  
の。室。と。さ。ひ。滅。し。魂。生。り。か。ぬ。と。死。人。を。さ。下。め。て。死。せ。り。と。死。され。ば。人  
の。死。を。さ。し。長。夜。の。睡。と。さ。し。屍。と。土。中。小。埋。る。死。夜。臺。小。入。る。と。も。い。ふ  
と。一。よ。く。の。理。を。悟。る。の。の。喜。し。も。あ。ら。う。と。哀。も。い。ふ。汝。觸。體。由  
其。あ。ら。う。と。説。と。さ。と。建。忘。せ。と。物。小。死。一。愛。も。入。り。て。の。國。倍。よ。告。ふ。に。

古事記卷之三

三十一

といひ捨て亦ゆく程ふ日へて暮るる夜ふ。うらぬりの八月の阿るれ  
 まるし跡を求め。多末の雲ふ裳濡らし十町あまうまうら。きんれば  
 ありる松の下ふ。二八むりりある美少年の長き袴の袂を草草の  
 雲ふ引く。あま玉の如光する袴の折目正しく積りたるが愛忠兵衛を  
 見く。小腰を折め先生まがへ餅ひのく只今示され教訓の道行  
 稱ふと云ふあもはまは。回答せんとて待たざるといひかけて。莞然と  
 笑顔蔭擧てまづる。風ふの奇いと愛忠兵衛へはとをんくの。這奴と  
 融解のむけするあらん。と云くと騒ぐ。筆きる。徐々ふ歩と云う。少年の  
 ろる議論ある。りあのかいひつると小懐あふ。あらしめ人ばまほしくいとの。バ  
 くとび莞尔と云うら笑も。かへ人迹絶る野末ふ。つとを。と使ひ  
 づら宿へ遠くゆけ。ば。脚がはき虫の青の外ふ。のるた八重津の夜

ハ殊さら家けくとも。月と燭ふかろ明さめ。誘りてとて先よまへ愛忠  
 兵衛へさる。とと。その後方小眼とてゆくと。いま。数百歩ふ至る。忽地  
 小黄まき。深ぼし。林原の中。小生垣締繞ら。柴の戸あり。丸  
 木の柱。茅の檐。僅ふ席六枚。むろと布設て。調度を納る。袋戸といふ。り  
 の外。又物ありとも。ええと。風爐の炭を。餅て。形のどく。金とけ。物の本  
 二三巻引ら。し。は。は。木椿ひ。と。りて。反古。裂て。ま。け。ら  
 か。油。小。黄。ま。ま。伽。羅。の。香。ま。ま。少年。ま。が。裡。小。入。り。て。ら。の。と。ま。入。り。あ  
 愛忠兵衛へ。河源。不。使。け。り。て。仙。家。小。宿。且。る。を。わ。ら。う。賓。主。の。坐  
 定。り。て。も。る。身。物。ま。が。り。て。蔦。茶。う。ま。て。ゆ。ら。主。風。流。の。生。憎。と。月  
 ハ。草。う。ろ。生。く。新。窓。小。こ。入。り。虫。ハ。庭。小。聚。ま。ま。声。賓。を。慰。め。ら。且  
 くと少年の。い。ま。う。嚮。み。先生。の高。論。と。ま。ま。と。ま。ま。懐。慨。小。堪。ら。た。惜。の

先主の死生の変と説くも死生の異なるをさるるもへば道家の訓を耳  
に多くも礼節の固圜と跳り出るへばさるるもへば其を示さるるもへば  
生る人の上やと死してへ更ふその正は夫死するものへは主君も下は臣  
僕も負富貴賤の別る長女若弱の序る四時とさるる各夜を  
さるる喜怒哀楽の情怒るけはさるるもへば天子もさるる  
さるる彼さるる死と樂むものへ真の樂よあはるる哀死と哀むものも亦真  
の哀よあはるる至仁の親るる至悲の傍は昔聖王の制度せふさるる  
礼とて首とさるるもへば人さるる情と登て天然不因らば夏るる冷るるれども  
その節さるるもへば衣と更秋るる暑けはさるるその節さるるもへば衣と  
襲喪不居の哀さるる日子果さるるもへばさるるもへばぬ笑顔とつるつる母よ  
さるる酒よ宴の樂さるる法則を乱さるるもへば意もあはるる唐諱さるる

不遜とてめは天子の親さるるうちさるる夫婦の睦もよりさるる礼節  
の桎梏も繁さるる仁義の讖鬼とさるるものへ人間のさるるもへば死さるるがさるる  
呵責さるるさるるもへば又今さるる何さるる回答さるるもへばさるるもへばこれ  
どもさるるもへばさるる亦このさるるもへばさるるもへばさるるもへばさるるもへば  
さるるもへばさるるもへばさるるもへばさるるもへばさるるもへばさるるもへば  
さるるもへばさるるもへばさるるもへばさるるもへばさるるもへばさるるもへば  
南荒の隙さるる人と食入國もあつ西天の中さるる教生せざる國もあつ北狄の  
物のあつとさるる東海の君子も富り死て日本の武烈支那の紂王の人  
と屠と樂さるるもへばさるる衛靈公の虜と車も繁せ麗鞠院の勢もへ  
位と授るるもへば例さるるもへばさるるもへばさるるもへばさるるもへば  
境も入ると死國の大禁と何さるるもへばさるるもへばさるるもへばさるるもへば

古今圖書集成

卷之三

とさるもの。あやむじらとさるはけり。友のつとむるは。化國の人のこととて。
 只哭つてとさるめ。且どその哭中。小樂をあり。喻て。人の文。播人の生。平ふ
 悲言。いふか。て。長。い。む。ろ。で。哭。も。付。ら。ば。物。不。感。じ。て。哭。へ。人。情。物。多。
 ぬ。と。哭。へ。情。慙。哀。し。と。と。嬉。が。り。この。國。の。も。限。ら。ん。や。或。は。乞。者。あ。ん
 どの。途。は。病。卧。て。今。臨。終。と。考。へ。た。或。は。水。波。或。は。彼。徑。在。死。の。の。道。次
 不。作。ら。と。た。の。蝶。の。ご。く。聚。ひ。蠅。の。如。く。朽。り。こ。と。と。を。認。り。の。踏。き。り。あ。ん。ど。
 ち。つ。れ。も。真。実。ふ。これ。を。憐。れ。と。茶。と。よ。臨。終。の。正。念。と。と。め。ん。と。と。さ。り。の
 へ。り。の。認。り。の。ま。さ。と。く。多。く。し。と。と。死。さ。り。の。不。益。は。差。夫。迷。る。る。く。
 逝。者。の。水。の。如。く。貴。賤。老。少。づ。く。の。浦。で。何。日。何。時。の。と。れ。死。は。没。入。や。と。れ
 ぬ。浮。草。あ。つ。ら。ら。化。の。枉。死。は。驚。く。ば。真。實。憐。む。む。ろ。く。又。さ。と。目。の。得
 と。さ。ら。も。ろ。く。と。か。く。ま。ふ。不。戲。氣。く。も。鬼。と。し。た。白。物。へ。の。國。は。徒。と。付。ら。む。

くらへ人の哀とを。身の手も。ふも。ふあ。と。ば。や。又。か。ま。ま。よ。付。ら。む。と。も。
 癡情。へ。ま。て。哀。死。と。を。樂。と。と。さ。る。を。よ。義。大。夫。曲。の。あ。り。且。さ。る。の。夢。あ。も
 約。と。と。胸。苦。し。と。と。鼻。涙。ら。ら。く。と。て。嫉。ら。り。物。の。本。の。あ。り。且。さ。る。の。孝
 子。節。婦。の。う。と。を。仰。り。て。理。の。追。は。れ。條。下。あ。り。何。ろ。う。と。泣。ぬ。り。の。中。は。
 その。哀。と。を。飲。ぶ。あ。り。の。且。さ。る。本。の。見。科。の。と。り。と。哀。と。と。さ。る。哀。む
 へ。り。れ。不。哀。と。あ。り。不。付。ら。ば。彼。が。哀。と。不。誘。り。と。感。じ。て。情。の。動。く。の。と。人。の
 天地。の。陶。器。あ。り。假。ふ。人。の。形。と。あ。り。陶。器。は。原。来。声。は。る。け。と。と。叩。け。ば
 玲瓏。と。さ。り。て。人。の。性。も。又。と。と。静。ら。る。か。天。性。も。且。と。物。も。叩。き。て。情。慙
 の。音。を。發。し。喜。び。も。と。且。怒。り。も。と。且。哀。も。す。れ。樂。も。も。と。れ。ど。人。の。性。も
 七。情。の。死。と。茶。碗。不。音。の。死。が。如。し。そ。を。母。と。と。可。ら。ん。や。又。あ。り。と。て
 可。ら。ん。や。か。金。石。陶。器。は。声。も。と。と。と。た。へ。ら。り。拵。も。又。声。も。声。も。く

て声こゑをならす。是則こればかり物類ものたち相感あひかた玄妙くわんめう深微しんゐの至いたり。妙且たう且また由よしを  
 論ろんがら。辨せん且また由よし解げが。人の性せい不あきら七情しちじやうのけし。感かんずるたう隨たう小ちひ七情しちじやう  
 あり。その理こと又また惜あはず。馬うまと指さす馬うま由よしの。琴ことを教おして終つひ小ちひ琴ことは。かまはる  
 へ鬚ひげ蹄ひづめ件あひくの惣もつ名なめて琴ことへ龍りゆう脣しん鳳ほう足あしホ件あひくの惣もつ名なる。りこれの  
 鬚ひげは。蹄ひづめは。回まわり毛けは。脊せ梁りやうと。件あひくふことと死しの馬うまと名なづく。こ  
 りの。こへ龍りゆう脣しんの鳳ほう足あしは。雲うん牙が。こへ蟹かにの。ととると死しの馬うまと名なづく。こ  
 と名なる。りの。死しぞ。喜き怒ど哀あ懼く愛あ惡あく態たいと。けて見みま。バ人の情じやうと  
 ととると。の。は。まると。死しの馬うま小ちひ馬うまの。具ぐ足あしは。且また馬うまとる。琴こと小ちひ琴ことは。  
 調てうは。琴こととる。金石こんせき声こゑる。叩たたけ。声こゑあり。人ひと小ちひ七情しちじやうは。感かんずる。情じやう發はつる。  
 物もの多た有あきと。なる。と。は。有あは。人ひと情じやう。天てん性せい有あきと。なる。と。は。と。  
 道みち入いる。と。感かんずる。動うごぬ。り。の。は。殊ことは。女子むすめの胸むね狭せうく。おの。し。裏うらは。迫せま

る。ゆ。多おほく。飲のむ。い。ち。も。哀あい。い。ち。も。一いち倍ばい決けつり。ろ。れ。と。真まは。哀あむ。玉たまの。緒いとも。  
 これの前まへも。い。ち。も。哀あい。い。ち。も。一いち倍ばい決けつり。ろ。れ。と。真まは。哀あむ。玉たまの。緒いとも。  
 る。と。と。似にり。段だんと。と。と。太た夫ふ場ばうと。定さだめ。後ごと。先まへの。よ。せ。り。の。あ。て。人ひとと。泣なせ。る。  
 飲のむ。と。る。の。め。つ。つ。と。三さんの。切きりの。あり。それ。を。見みて。哀あむ。哀あむ。の。假かり物ものの。且かつに。  
 物ものは。鏝えん引ひと。と。落おと。と。涙なみだ。小ちひ袖そでと。絞しぼむ。と。牙かみの。あ。て。と。却かへ保たも養やしやうする。もの。  
 る。の。これ。ふ。よ。り。と。見みて。哀あむ。哀あむ。傷やう御ごと。哭なむ。と。三さんの。切きり。て。泣なせ。る。と。と。  
 吝しん嗇さく人の悲かな言ことよ。り。の。母ははの。け。り。ひ。の。の。と。と。と。牙かみの。あ。て。ら。で。保たも養やしやうと。  
 る。の。お。ん。牙かみと。と。と。や。斂あ人の。涙なみだ。ハ。殊ことと。る。と。い。ふ。哀あ傷やう御ごの。人ひとの。涙なみだ。ハ。玉たまの。  
 由よしも。金かねも。も。ら。ら。移うつり。と。も。泣なを。保たも養やしやう小ちひ浮う世よの。憂うれを。お。ひ。忘わすれ。妙めう茶ちやも。て。亦また  
 金かね銭せんの。代かが。と。世よは。彼かの三さんの。切きりと。泣なせ。る。の。あ。て。と。と。と。感かんずる。れ。と。理ことを。  
 り。て。正ただと。と。死しの川かわ萱あやの。山やまの。段だん阿あ波はの。鳴なる戸との。順したが礼らい場ばう。さ。の。と。哀あい。い。ち。も。の。





侍らば。よく思入ても人のくじ。彼泡十郎兵衛と云ふ人の。忠義の爲  
 ぢやとて。盗賊と云ふ。非義非道の終ひて。合々の入る天爵の終よその  
 身小脱まじど。コガ女児ともあつて。合の多敷と自業自得女児の可  
 愛なるまじと。祝の因果が子小報ふ。身々々出する。清刀がうらうて。わら  
 のぬ。護たやめ。ち弓が。子小の言小。盗賊杜騙と云ふ。果も。國次の刀食。浅  
 の爲。重いた義。ふるる。命捨。いさうく。厭つぬと。あとの女の鼻の先主  
 の爲る。れびと。盗賊して。忠義と云ふ。言詰。同助。夫婦が。む。つ。めと。盗  
 賊の悪名と。せられ。古主の面へ。泥と塗る。不忠の至る。不義の至る。苦  
 下中と。さへ。虚も。決へ。ら。や。ね。ど。人情ハ。理と。さ。ね。と。只。さ。る。所。の。あ。れ  
 さ。ふ。ら。び。と。決へ。ら。ら。で。あ。ら。ふ。と。よ。の。行。は。推。あ。か。が。浄。福。理。他。者。も。さ。る  
 かの。る。り。か。理。を。推。て。論。ぶ。と。死。ハ。態。情。も。迷。ふ。りの。不。圖。盗。も。さ。る。も

の。か。か。忠。義。不。疑。する。丈夫。が。さ。つ。ま。ら。なる。と。あ。り。ま。す。二。つ。と。二。つ。と。け。く。  
 ま。つ。い。と。て。盗。か。う。ら。ふ。や。又。婆。と。どの。も。婆。と。どの。十。あ。る。る。や。る。ぬ。孫。女。児  
 小。親。の。在。所。と。索。称。よ。と。そ。大。枚。の。合。を。め。と。せ。て。獨。行。と。さ。う。さ。の。石。を。抱。う  
 せ。て。測。小。臨。す。薪。を。負。て。火。ふ。あ。れ。と。教。する。小。異。る。ら。び。と。や。釈。あ。ら  
 ぬ。と。ま。じ。ど。と。も。胡。麻。の。蠅。小。う。た。つ。け。ら。れる。が。助。り。が。る。命。る。り。彼。婆。と  
 かの。ま。つ。この。ころ。と。十。郎。兵。衛。が。悪。行。よ。と。ひ。比。且。バ。女。児。が。枉。死。の。苦。む  
 小。と。ま。の。も。一。幕。決。ま。る。ふ。及。び。ど。亦。彼。加。孫。重。氏。入。道。刈。萱。と。の。も。不  
 不。簡。名。告。あ。ら。て。も。大。さ。る。ら。ふ。各。告。を。物。を。あ。ら。せ。て。石。堂。丸。は。ほ。せ。と。く  
 又。見。物。も。袖。紋。と。さ。る。その。ま。の。う。の。へ。質。屋。庫。と。の。草。紙。へ。ら。ら。り。哉  
 され。び。と。あ。ら。ひ。と。彼。戯。ん。と。は。り。の。へ。ま。は。厭。鬼。と。天。か。と。く。実。情。あ。ら。ぬ  
 此。の。除。名。と。さ。る。三。の。切。も。大。く。推。て。あ。り。ぬ。道。理。は。稱。ひ。理。義。ふ。の。ま。ら。

古事目録下巻後編卷三

十一





孔子家語桓山四鳥云

へいこゝろか。あつれば羊志か貴妃か哭しん。傍り不似れども。その快も  
亡妻と云ふ滅らうや。俳優人の愁歎場也。上りハ藝不身を入して  
我を忘るる哀むる。又見物も彼ぞ。こもその愁歎ハ真の哀も  
あふれども。憶せしむる不あらんその哀もと飲ぶりの世間つむくの  
孟嘗君又つむくの世祖あつらん。さると先生睡らば。か國俗乃  
哭とのも。うらぬとて滅めぬ情も疎さ感ひ不た。君彼釋子乃  
啼声とせぬへび。終日嗥て嗔ども。嘔まど。声おのづから出さ任  
て在怒哀樂不困不あなば泣といふも和ざあり。桓山四鳥の鳴は比へて  
淫婦かつらりの哭声とさるもひ。孔子のいふくさねる先生あつた  
がるべし。か國俗の物も哭と釋兒の啼るか如し。と笑さるめぬいつか  
を。凡哀傷郷の人とて。物も涙り。涙るべし。席あても哀も飲ぶ

へいこゝろか。あつれば羊志か貴妃か哭しん。傍り不似れども。その快も  
亡妻と云ふ滅らうや。俳優人の愁歎場也。上りハ藝不身を入して  
我を忘るる哀むる。又見物も彼ぞ。こもその愁歎ハ真の哀も  
あふれども。憶せしむる不あらんその哀もと飲ぶりの世間つむくの  
孟嘗君又つむくの世祖あつらん。さると先生睡らば。か國俗乃  
哭とのも。うらぬとて滅めぬ情も疎さ感ひ不た。君彼釋子乃  
啼声とせぬへび。終日嗥て嗔ども。嘔まど。声おのづから出さ任  
て在怒哀樂不困不あなば泣といふも和ざあり。桓山四鳥の鳴は比へて  
淫婦かつらりの哭声とさるもひ。孔子のいふくさねる先生あつた  
がるべし。か國俗の物も哭と釋兒の啼るか如し。と笑さるめぬいつか  
を。凡哀傷郷の人とて。物も涙り。涙るべし。席あても哀も飲ぶ  
へいこゝろか。あつれば羊志か貴妃か哭しん。傍り不似れども。その快も  
亡妻と云ふ滅らうや。俳優人の愁歎場也。上りハ藝不身を入して  
我を忘るる哀むる。又見物も彼ぞ。こもその愁歎ハ真の哀も  
あふれども。憶せしむる不あらんその哀もと飲ぶりの世間つむくの  
孟嘗君又つむくの世祖あつらん。さると先生睡らば。か國俗乃  
哭とのも。うらぬとて滅めぬ情も疎さ感ひ不た。君彼釋子乃  
啼声とせぬへび。終日嗥て嗔ども。嘔まど。声おのづから出さ任  
て在怒哀樂不困不あなば泣といふも和ざあり。桓山四鳥の鳴は比へて  
淫婦かつらりの哭声とさるもひ。孔子のいふくさねる先生あつた  
がるべし。か國俗の物も哭と釋兒の啼るか如し。と笑さるめぬいつか  
を。凡哀傷郷の人とて。物も涙り。涙るべし。席あても哀も飲ぶ

古事類聚卷之三

二二

忘れざれば哀むは。かゝるに有用とあるは、用あり。あつたよ人の親  
 するもの。醉するやとありとつども。その子とをえりかひせば吐血中  
 喘くぞと頓滅せんといふは死す。おどろた悲を周章して又一家の主  
 たるもの。常小食より死す。妻子のこを飲ぶと病と死は食され  
 べ碗とくをてこを飲ぶ病覆て茶を末め。哀と死よりてをがめて哭さ  
 飢て後よ食を倍し。渴て後小大飲之。熱て後小氷を投寒て後よ火を  
 与ふは苦む亦除さる。うの牙の死してその益あり。こは所謂有用の  
 中の用あり。抑亦遅くはばや。よく執行志ありと説つけられて後悲  
 兵衛の席も堪むと忙しく。柴の戸を逃出て足小信して二三町走り退  
 つたえよとあつた室へ忽地うせり。天と母のぐと明るまふ。悔さび  
 と回く。ぞんかう見えれば浅きや。たのめ慰む。尾花が下の。融體の母と

アふついのう。これと怪むおのあま。紙老時あづる降り来  
 つ。津舟とさうられく。そのま乗まバ閃くと升て虚空へ入りたり。

○總評

魚と網をおそれどく人をおそれ人の命を哀まざる物と哀  
 む。網はあつたりのる。故小魚とをとおそれど物の已を益とほ  
 なよ人こそを哀む。以あつたる魚の喜する紙志と。釜中又拵び  
 人の命のさるるをとおりので六慾の街は拵ぶ物と哀む。もの  
 をかまひよあつた。己を哀むの哀とを忘るる。あつた。り。物  
 を哀むとさ。何國も哀傷御あつた。り。己を哀むと死  
 ハ誰か。是は夢想兵衛あつた。り。よく哀とを忘る。りの喜怒も  
 る。好憎は。既よ喜怒る。好憎るけは。哀傷と名する。煙は。



